

研究調査資料「会津八一の生涯と芸術論序説 —美術史家と熊谷短歌文化の関わり」

(熊谷市立江南文化財センター 山下祐樹)

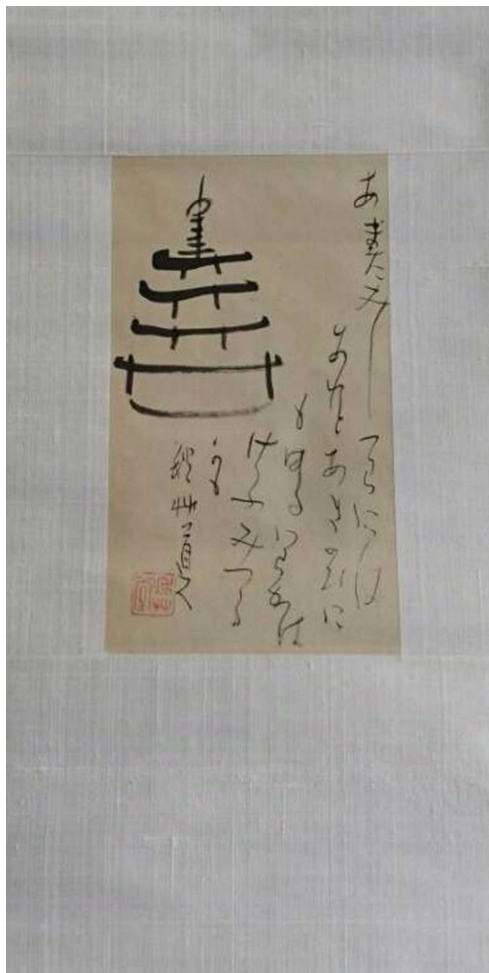
昭和時代から熊谷市中西の個人邸にて保存され、後に熊谷市上之の古刹・龍淵寺に寄贈された美術品の一つが、美術史家そして歌人として活躍した会津八一氏による直筆の書画である。その書画の掛軸2点についての概要を紹介する。

会津八一

秋艸道人【病中法隆寺をよぎりて（第1首）】

会津八一 第一歌集『南京新唱』
なんきょうしんしょう

大正13年（1924）より（絵：法隆寺五重塔）



病中法隆寺をよぎりて（第1首）

あまたみしてらにはあれどあきのひにもゆる
いらかはけふみつるかも

(あまた見し寺にはあれど秋の日に燃ゆる甍は今日
見つるかも)

歌意 いくたびも訪れ見慣れた寺ではあるが、秋の
日を浴びて燃えるような甍は今日始めて見た。

「病中法隆寺をよぎりて」7首の第1首。病身を押して訪れた法隆寺のはじめて見る燃えるばかりの甍を素直な感動として詠む。病身の目から見たこの寺への詠嘆が、次に続く金堂壁画の荒廃への嘆きとして続く。八一自身がこの7首の中で詠んだ壁画は戦後火災にあう。火災に会う前に何度も八一が保全を主張したが、実行されず、火事で大破したのは昭和24年のことである。八一は自註や随筆で聖徳太子が身後の罹災を予知した歌「斑鳩の宮の甍に燃ゆる火のほむらの中に心は入りぬ」を引用し、この歌に想いを馳せている。

病中法隆寺をよぎりて（第2首）

うつしよのかたみにせむといたづきのみを
うながしてみにこしわれは
(うつし世の形見にせむといたづきの身をうながして
見にこしわれは)

歌意

この世の形見にしよう病気の身をせきたてて私
はこの法隆寺を見に来たのだ。

「病中法隆寺をよぎりて」7首の第2首。病身を押しての訪問、八一の強烈な法隆寺への思い入れが手に取るようにわかる。病気ゆえ、二度とこの地を訪れることが無いかもしれないという切実感が「みをうながして」（我が身をせきたてて）と詠むことよって重く迫ってくる。1921年（大正10年）10月、持病の腎臓炎の再発で千葉勝浦で療養していた八一は、同10月23日法隆寺を訪れ、この7首を作った。

病中法隆寺をよぎりて（第3首）

いたづきのまくらにさめしゆめのごとかべ
ゑのほとけうすれゆくはや
(いたづきの枕に覚めし夢のごと壁絵の仏うすれ
ゆくはや)

歌意

病床の枕で目覚めた時のおぼろげになってゆく夢のように、金堂の壁画の仏たちは色あせ、落し、薄れてゆくことであるよ。

持病の腎臓炎で療養していた八一は完治を待たず

に法隆寺を訪れる。壁画への異常なまでの執念が、薄れゆく夢との比喩で荒廃する壁画への哀惜をいやが上にも際立たせる。

病中法隆寺をよぎりて（第4首）

ひとりきてめぐるみだうのかべのゑのほとけのくにもあれにけるかも

（一人来て巡る御堂の壁の絵の仏の国も荒れにけるかも）

歌意

ただひとり法隆寺にきて、巡り見る金堂の壁画に描かれた仏の国も荒れてしまったことだなあ。

金堂の壁画の荒廃は激しく、八一は耐え難い気持ちを深い悲しみを持って一気に詠った。後年の火災による「全滅とも云うべき」壁画はもう見る事ができないが、のちに現代の画家たちによって綿密に再現され、金堂の「ほとけのくに」を作っている。

病中法隆寺をよぎりて（第5首）

おほてらのかべのふるゑにうすれたるほとけのまなこわれをみまもる

（大寺の壁の古絵に薄れたる仏の眼われを見守る）

歌意

法隆寺金堂の古い壁画、その色褪せ消えてしまいそうな仏の眼が私をじっと見守っている。

壁画の荒廃を嘆く八一の心（眼）は壁画の仏を凝視する。そこでは生きた仏が静かに、しかし確実に作者を見守っている。主客の一体化がこの歌を作ったといえる。歌人吉野秀雄が「鹿鳴集歌解」で、「ほとけのまなこ」はいつれの仏眼でもよく、壁画全部のそれでも差支えない。しかし、「みまもる」感じから言えば、西大壁阿弥陀浄土の左右の脇侍が眼前に浮かんでくる。一

病中法隆寺をよぎりて（第6首）

うすれゆくかべゑのほとけもろともにわがたまのをのたえぬともよし

（薄れゆく壁絵の仏もろともにわが魂の緒の絶えぬともよし）

歌意

色褪せ薄れゆくこの壁画の仏たちとともに、私の

命も絶えてしまってもかまわない。

「病中法隆寺をよぎりて」対面した薄れゆく壁画の仏たちへの愛惜の念を八一は高めていった。消えうせるかもしれない仏たちと一緒に死んでしまってもいいと言い切る。仏たちへの感情移入と「病中」ゆえの気持の高ぶりとが相まって、この歌が詠われる。第7首の「仏の未来を憂う」を終わりとする全7首の中で、この歌をとらえることによって「たえぬともよし」の純粋な表出が、自然的な意識に基づくものとして伝わる。

病中法隆寺をよぎりて（第7首）

ほろびゆくちとせののちのこのてらにいつれのほとけありたすらむ

（滅びゆく千年の後のこの寺にいつれの仏ありたすらむ）

歌意

滅びゆく千年の後のこの法隆寺で、どの御仏がお残りになっておられるのだろう。

かつてはとても美しかったであろう壁画の剥落や衰退ぶりを目の当たりにして、千年後の法隆寺の全ての仏たちに思いをはせる。壁画への憂いから、仏たちの未来を悲しむが、そこには強い存続への願いが込められている。

壁画炎上後、八一は「あれほど好きで好きでたまらなかつたものが急になくなって、ほんとに泣くに泣かれないほどにくやすい」（随筆「渾齋随筆以降 壁畫問題の責任」）との一節を残している。

【会津八一 主な参考文献】

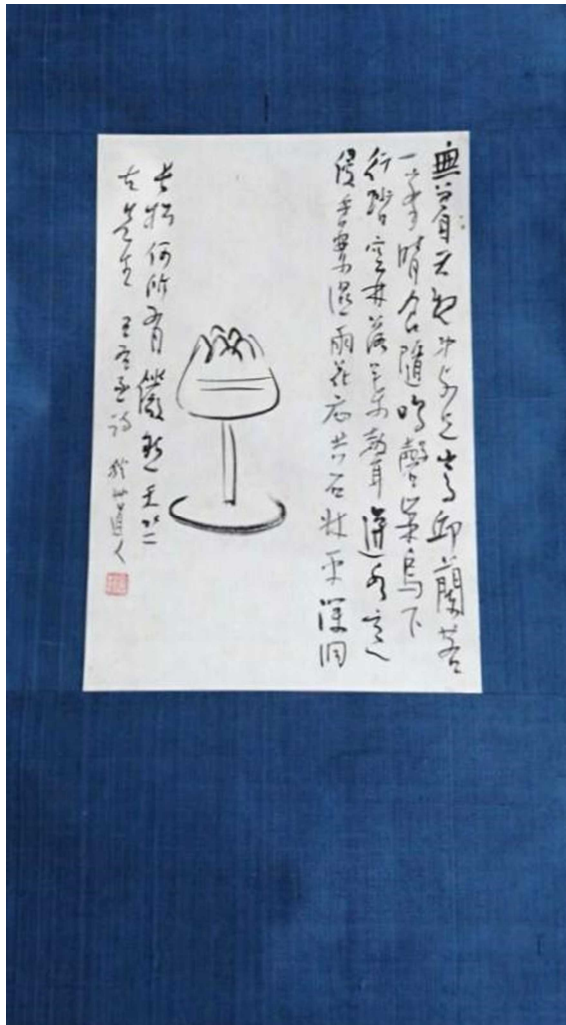
- 『会津八一全集』増補版全12巻 中央公論社 1982-1984年
- 『渾齋随筆』中央文庫 1978年
- 『續 渾齋随筆』中央文庫 1984年
- 『東洋美術史』（解説大橋一章）中公クラシックス 2009年
- 『会津八一全歌集』中央公論社 新版 1986年
- 『自註 鹿鳴集』（解説宮川寅雄）新潮文庫 1969年
- 『自註 鹿鳴集』（解説植田重雄）岩波文庫 1998年
- 『鹿鳴集 歌集』短歌新聞社文庫 1995年
- 吉野秀雄『鹿鳴集歌解』中公文庫 1981年
- 植田重雄『秋艸道人会津八一の生涯』恒文社 1988年
- 植田重雄『秋艸道人会津八一書簡集』恒文社 1991年
- 植田重雄『秋艸道人会津八一の芸術』恒文社 1994年
- 植田重雄『秋艸道人会津八一の学芸』清流出版 2005年
- 植田重雄『会津八一の般若心経』八吾の会 2008年

会津八一 秋艸道人【王右丞詩】

『唐詩選』 卷五七言律詩

「過乘如禪師蕭居士嵩丘蘭若」王維

(絵：博山^{はくざん} 焔)



「過乘如禪師蕭居士嵩丘蘭若」王維

無著天親弟與兄
嵩丘蘭若一峰晴
食髓鳴磬巢鳥下
行踏空林落葉聲

迸水定侵香案濕
雨花應共石牀平
深洞長松何所有
儼然天竺古先生

王右丞詩 秋艸道人

「乘如禪師・蕭居士の嵩丘の蘭若に過ぎる」
無著 天親 弟と兄と

嵩丘の蘭若 一峰晴る
食は鳴磬に随いて巢鳥下り
行は空林を踏みて落葉声あり

迸水は定めて香案を侵して湿るおい
雨花は応さに石牀と共に平らかなるべし
深洞長松 何の有もつ所ぞ
儼然たる天竺の古先生

じょうにょぜんじ しょうこじ すうきゆう らんにや よぎ おうい
(乘如禪師・蕭居士の嵩丘の蘭若に過る) 王維

むじゃく てんじん てい けい
無著 天親 弟と兄と
すうきゆう らんにや いっぽうは
嵩丘の蘭若 一峰晴る
しよく めいけい したが そううくだ
食は鳴磬に随いて巢鳥下り
こう くりん ふ らくようこえ
行は空林を踏みて落葉声あり

ほうすい さだ こうあん おか うるお
迸水は定めて香案を侵して湿い
うか まさ せきしょう とも たい
雨花は応に石牀と共に平らかなるべし
しんどう ちようしよう なん あ ところ
深洞 長松 何の有る所ぞ
げんぜん てんじく こせんせい
儼然たる天竺の古先生

その昔の無著と天親の兄弟にも似た
この二人の住んでおられる嵩丘の寺院は
晴れわたった空にそびえる一つの峰に
抱かれている。
食事ときには打ち鳴らす磬の音につれて、
巢についていた鳥も舞いおりて
食物をもらうし、
戸外を歩くときは、
人気のない林の道を踏むとともに、
落葉が音をたてる。

仏のみ心にならって建てられたこの寺には
清い泉があふれ出て、
香炉を置く机までもひたし、
うるおすことであろうし、
ここに修行する人の殊勝さに感じて、
諸菩薩の降らす花は、
石の寝台と同じ高さにまでつもることだろう。
深い洞穴、高い松は、その中、その下に
何を抱いているかとみれば、
さながら天竺の仏となった古先生、
あの老子のような二人の姿があった。

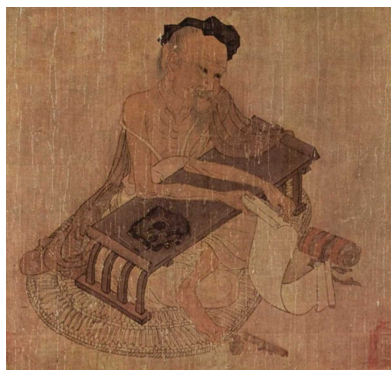
王維（おうい、生没年は『旧唐書』によれば699年 - 759年、『新唐書』では701年 - 761年）。

王維は、中国唐朝の最盛期である盛唐の高級官僚で、時代を代表する詩人。また、画家、書家、音楽家としての名も馳せた。字は摩詰、最晩年の官職が尚書右丞であったことから王右丞とも呼ばれる。河東（現在の山西省永濟市）出身。同時代の詩人李白が“詩仙”、杜甫が“詩聖”と呼ばれるのに対し、その典雅静謐な詩風から詩仏と呼ばれ、南朝より続く自然詩を大成させた。韋応物、孟浩然、柳宗元と並び、唐の時代を象徴する自然詩人である。とりわけ、王維はその中でも際だった存在である。画についても、“南画の祖”と仰がれている。

『唐詩選』（とうしせん）は、明の李攀竜が編纂したといわれる唐代の漢詩選集。出版年代は李攀竜の死後、16世紀末から17世紀初頭とされる。五言古詩14首、七言古詩32首、五言律詩67首、五言排律40首、七言律詩73首、五言絶句74首、七言絶句165首の計465首を収録する。唐詩の選集としては、日本では『唐詩三百首』と並んで良く読まれている。特に江戸時代には広く読まれていた。

【王維・唐詩書関連 主な参考文献】

- ・『東洋史辞典』（京都大学文学部東洋史研究室、東京創元社、1974年）、「王維」、「南宗画」の項目
- ・小川環樹、都留春雄、入谷仙介『王維詩集』（岩波文庫、初版1972年）
- ・都留春雄『中国詩人選集6. 王維』（岩波書店、新版1990年ほか）
- ・小林太市郎『王維の生涯と藝術』（全國書房、1944年／新版「著作集4」、淡交社、1974年）
- ・張彦遠『歴代名画記』（長廣敏雄訳注、平凡社東洋文庫 全2巻、1977年）



伝王維筆
《絹本著色伏生授経図》
唐時代

大阪市立美術館蔵

あいづやいち 会津八一 [1881~1956]



歌人・書家・美術史家。新潟県生。号は秋艸道人・渾齋等。早大卒。中学時代から俳句・和歌を作る。奈良の古寺を巡遊し仏教美術への造詣を深め、美術学者としての地歩を築くかたわら作歌を本格化、万葉調の平かな書きによる荘重かつ芳醇な歌風で奈良古寺古仏を詠み、美術史分野を開拓した。歌集に『南京新唱』『鹿鳴集』、歌論・歌話集に『渾齋隨筆』等。また書にも独自の境地を開き、書跡集『遊神帖』等がある。文学博士・早大名誉教授。

年譜

- 1881年（明治14） 8月1日、新潟市古町通五番町に父、政次郎、母、イクの次男として出生。
- 1895年（明治28） 14歳 新潟県尋常中学校（現県立新潟高等学校）入学
- 1899年（明治32） 18歳 俳句を始め、万葉集や良寛らの歌を読むこの頃、尾崎紅葉、坪内逍遙に会う
- 1900年（明治33） 19歳 高校を卒業、上京し正岡子規と面会、その後脚気を病み帰郷
- 1901年（明治34） 20歳 「東北日報」「新潟新聞」の俳句選者となる
- 1902年（明治35） 21歳 東京専門学校（早稲田大学）高等予科に入学、翌年早稲田大学文学科に入学
- 1906年（明治39） 25歳 大学卒業、英語教師として新潟県中頸城（なかくびき）郡板倉村の有恒学舎（現県立有恒高等学校）に赴任
- 1908年（明治41） 27歳 初めて奈良に旅行し、20首の短歌を詠む
- 1910年（明治43） 29歳 坪内逍遙に招かれ、早稲田中学校英語教師になる
- 1924年（大正13） 43歳 第1歌集「南京新唱」刊行
- 1926年（大正15） 45歳 早稲田大学文学部講師となり東洋美術史を講義
- 1931年（昭和6） 50歳 早稲田大学文学部教授就任
- 1938年（昭和13） 57歳 早稲田大学文学部に藝術学専攻科を設置し主任教授となる
- 1940年（昭和15） 59歳 歌集「鹿鳴集」刊行
- 1942年（昭和17） 61歳 隨筆集「渾齋隨筆」刊行
- 1944年（昭和19） 63歳 歌集「山光集」刊行
- 1945年（昭和20） 64歳 早稲田大学教授を辞任。空襲により罹災し、新潟県北蒲原郡中条町へ。7月10日、養女きい子亡くなる（33歳）
- 1947年（昭和22） 66歳 歌集「寒燈集」刊行
- 1948年（昭和23） 67歳 早稲田大学名誉教授となる
- 1953年（昭和28） 72歳 宮中歌会始の召人となる。「自註鹿鳴集」を刊行
- 1956年（昭和31） 75歳 11月21日、冠状動脈硬化症により新潟大学付属病院で永眠

（編集：熊谷市教育委員会：2020年2月24日）